

丸山仁司 編集

『考える理学療法—評価から治療手技の選択』

宮本重範

(札幌医科大学保健医療学部)

本邦において、オーストラリアの理学療法士、マーク・ジョーンズ氏が全国研修会や理学療法教育に携わる教員の講習会を通して理学療法におけるクリニカルリーズニングの重要性を説いて久しい。

運動器疾患の理学療法評価においては、まず、患者の訴えを十分聴き取ることが大切である。問診で得られた情報に基づき姿勢や動作を観察し、さらに必要と思われる他動的検査・測定、触診を行い、得られたすべての症状、徴候を統合・解釈することにより障害の部位、障害組織などの診断を行うべきである。これらのリーズニング過程を経て障害像が明らかになると同時に、適切な治療方針を立て、有効な治療法・手技の選択がなされることになる。このような系統的な評価がなされない限り、理学療法の効果についての一貫した根拠は得られないし、従来通りの経験や個々の技量で治療が行われることになる。

そのような観点から本書「考える理学療法—評価から治療手技の選択」は、臨床における系統的評価と治療の選択の仕方について従来のテキストにない斬新な切り口で編纂され、クリニカルリーズニングの実際を示すことによって読者の理解を助けている。

まず、本書は全章にわたってクリニカルリーズニン

グの概念が貫かれおり、前半の10章までは理学療法のEBM、ICF(国際生活機能分類)と理学療法、クリニカルリーズニングの理解、評価・記録法の重要性、医師との連携法および‘痛み’や‘かたさ’の鑑別、動きの認知など実践に必要な基本的知識について記載されている。後半30章までは日常遭遇しやすい症状、徴候についてクリニカルリーズニングし、治療法・手技の選択も具体的に簡潔に解説している。各章の記述において重要な用語はmemoとして簡潔に解説され、AdviceとSumming up(要約)でまとめられていて、理解しやすい。

本書を読んだ後、読者はこれまで以上に評価の内容について考えをめぐらし、考えることができるようになり、リーズニングすることによって評価することが以前にも増して楽しくなるものと確信する。また、著者らに共感し、理解する仲間が増えることは臨床理学療法の科学性の構築につながるとともに障害を有する人々に対し質の高い理学療法を提供できることにもなる。

したがって、本書は特に運動器疾患の理学療法に携わっている理学療法士にとって必読の書であり、また、理学療法士の教育に携わっている諸氏および学生にも一読するよう薦めたい。さらに、本書の発刊を機に理学療法の実践について真剣に考え、クリニカルリーズニングができる理学療法士が多く育つことを大いに期待したい。

●B5判 384頁

定価(本体 5,500円+税)

2004年 文光堂・刊